

皇紀2600年記念奉祝天覧武道大会における 木村政彦七段について

安河内 春彦

I. 緒言

「鬼の柔道」「完全不敗の将軍」「常勝木村」「昭和の三四郎」などの形容で評され、直木賞作家の、故富田常雄氏は「木村の前に木村なく、木村のあとに木村なし」と最大級の賛辞をおくったほどである。その道に精進する者にとって誠に名誉ある賛辞というべきであろう。

明治、大正、昭和を通じ武道界最大最強の麒麟児と謳われた木村政彦七段は、昭和11年に開かれた明治神宮大会大学高専の部で優勝して以来、昭和24年の全日本柔道選手権大会で石川隆彦七段との決勝で引き分け、二人優勝となるまでの13年間の不敗無敵を誇ったまま現役を退いた。

いつの時代においても、史上最強者はだれかと、いろいろ論議をされるが、元全日本選手権者で数度、木村七段と対戦した経験をもつ松本安市八段は「対戦した経験からして、間違いなく史上最強者である。」と断言する。松本安市八段はさらに、過去に強いと思った選手ではこの木村七段と東京オリンピック無差別級優勝の A.T.ヘーシンク、ミュンヘンオ

リンピック無差別級・重量級を制した W.H.ルスカ、そして、ロスアンゼルス無差別級優勝の山下泰裕の4名だとし「だが、この中では木村七段がスピードと技の切れ味でまさる¹⁾。」と述べている。また、木村七段と対戦した経験者のほとんどが、強烈な試合の印象ぶりからして、木村七段を第一人者に挙げている。

昭和の鬼才と謳われた木村七段の師で、昭和初期の第一人者であり木村七段に「死の極限的鍛錬」を課した牛島辰熊八段は、「寝技、立技で最高の技術を駆使した点で木村こそ第一人者である。」²⁾と語っている。

この木村政彦七段の強さが広く全国に知れ渡ったのは、昭和15年6月の皇紀2600年奉祝天覧武道大会で、無人の境を行くがごとく群を抜いた強さがあったからであろう。

大会は、今から60年前のことではあるが木村政彦七段の対戦者および、木村政彦自著「鬼の柔道」講談社版「皇紀2600年記念奉祝天覧武道大会」などの資料により補記して述べてみることにする。

II. 第一章

天覧武道大会は、当時の武道界全般に大変な反響を呼びこの発表が行われると、関係者は大いに緊張したといわれ「柔道50年史」では、この間の事情をつぎのように伝えている。

「指定選士の推薦があり、審判規定が制定せられ、府県選士の予選がはじまると、なんとか代表選士として天覧の栄光に浴しようと各地の予選は盛大、壮烈をきわめ、指定選士あるいは府県代表に選ばれたものは家門の榮譽とし、真にこの榮譽にこたえなければと精進潔斎して摂生につとめ、技能の練磨にはげんでその日にそなえた。³⁾」
と伝えている。

大会は、昭和15年6月18・19・20日の3日間にわたり皇居内の済寧館で開催されることに決定した。柔道の部選士の内訳は、3府43県それに樺太、北海道、朝鮮、満州、関東州の在住日本人とし府県選士52名、指定選士32名、計84名である。

木村政彦七段は、試合の準備としては特別なことは行わなかったようであるが普段の稽古よりやや多めに行った程度であると語っている。普段の稽古内容は、朝5時の起床で起きるとすぐ庭に出て巻きワラを突いて空手の練習をする、それから塾内の掃除、そして拓殖大学へ通う。授業がすむとすぐ拓殖大学の道場で稽古、それが終わると今度は近く的高等師範学校の道場、警視庁、講道館と稽古に回り、さらに、満蒙開拓少年義勇軍の道場で付近の青少年に稽古をつけて牛島塾に帰る。

牛島辰熊は「昼間、人の何倍か稽古したう

え、夜中にゴッン、ゴッンと庭で音がする。真夜中に木村が起きて巻きワラを突き、檜の木を相手に打ち込みをしているのだ。その音で、目がさめることがたびたびあった。だが、せっかく眠らずに鍛えているのだから、やめろというわけにもいかないので、ワシは布団を頭からかぶって寝たもんだ⁴⁾」とそのころのことを回想している。

あらゆることを柔道に直結したといわれ、まさに超人といわれるゆえんは、この稽古量からきているようである。常人の3倍以上の稽古をおこない、天覧試合3ヶ月前よりやや多めに稽古したと述べているのをみると、師牛島辰熊八段が課した「死の極限的鍛錬」より強い、それ以上の稽古量を消化したようである。

以上のように、厳しい稽古量をこなした木村七段の体格は、当時で平均よりやや小さい方で身長170cm、体重85kgであり、「柔よく剛を制す」の例え通り大男を軽く一蹴しており、これも常人の3倍以上の稽古量をおこなった自信から「相手を大きいと思ったことなどなかった⁵⁾」と述べている。

木村政彦七段は指導者にも恵まれ、当時拓殖大学の師範牛島辰熊八段に背負投、大内刈、寝技を学び、同じく師範の大谷晃八段に送り足払い、支え釣込足などの足技を中心として学んだ。ことに牛島辰熊八段の薫陶は大きかったようである。明治、大正、昭和の柔道家を通じて、「かくのごとき強烈なる攻撃精神はいまだかつてない。」と評された牛島流の攻撃型の柔道を着実に継承し、それ以上に木村政

彦七段の柔道は「げに攻むるにも守るにも、戦車のごとき木村の奮闘ぶりだ⁶⁾」と新聞紙上に評されたように攻守完全なる柔道を完成したようである。

木村七段は、前述のように動的な肉体的鍛錬は常識をはるかに超えた超人的なものであったが、さらに静的な禅にも興味を示し中国の臨海和尚が「禅とは、学問でなく経験である。また直感であり、体験である。」との言葉に感銘をうけ、柔道とまったく同じであるとの結論から自身でもはじめるようになった。精神修養としての禅の行い方は暗い部屋に一人座り精神統一をはかると、はじめは無我の境地になりさらに続けると「勝」「負」の二文字が闘の中で交差さし、自分の額の中央に「勝」という文字がでてくると、明日の試合には勝てるという確信を持った⁷⁾と述べている。したがって試合は形式的な過程に過ぎなかったようである。

天覧試合の前日は、普通の試合と趣きをことにしているので天皇陛下の臨席があることから、身辺を清潔にし勝ったものとして、粗相のないように表彰式のリハーサルまでおこなったという。それと師牛島辰熊八段より対戦相手の作戦を立てるようにとのことから、すでに早期決勝の作戦を具体化してあったので、それを師に報告すると牛島辰熊八段もそれに同意し、自信はありますとの返事をしたのも、死を賭した鍛錬を経た結果から心・技・体どの面をとっても、他の追随を許さない確信をもっていただからだろう。

III. 第二章

天覧試合の様子は、講談社刊の「紀元2600年奉祝昭和天覧試合」に詳述されているので、以下これを引用することにする。

「國はかはり、職を異にして居ても、只一つ、彼等が、玉座を咫尺の中に拝して、平生鍛錬の武技を闘わせる光栄に感激して居ることは、みな同じである。戦って勝てば更によし、戦って勝たずとも、此の如き光栄を荷ふことは、日本に生れ出たる男子一代の快心事、彼等の氣は逸り、心は勇み立って居る。己に選士と決定して以来、今日の晴の出場に備えるため、健康に留意し、稽古に精励し、やうやく無事に、ここ迄漕ぎつけたので、いづれも吻としている容子。午後4時、指定選士の試合は、16組より成立ち、みなこれ、柔道界の中堅陣、第一回戦に於て、早くも眼に見えぬ戦気、ひしひしと迫り来る。⁸⁾」と天覧試合の厳正な雰囲気語っている。

「1回戦の木村選士は、人も知る牛島辰熊教士の内弟子「常勝木村」の名高く、他流試合に出て、いまだかつて一度も敗北したことがなく、怖ゆるところなく、白刃を踏み、砲丸を冒し、突進し、邁進して、かつて後退せざる戦闘的精神は、師匠牛島教士の気魄をそのままうけついでいる。他方、緒方惇一選士は体操学校学生で、22才指定選士の最年少であるが、木村選士は緒方選士の釣込腰を軽く切り返して勝つ。⁹⁾」

「2回戦の木村選士は、海軍現役の高村徳一選士が場に立つ。高村にとっても、木村は

大敵、木村にとっても、高村は強敵。この一戦、優勝街道驍進中の彼等にとって容易ならぬ試合である。

木村選士は高村選士に実力を発揮する暇を与えず、大外刈にて一本、時間1分35秒。¹⁰⁾

「3回戦の木村選士に対するは、京都武専の大館勲夫選士である。大館選士、胸中に成る算あるものの如く、敢然として進み出る。木村選士これを受けて、捨身の太外刈の一撃、これが鮮やかに決まって、5尺8寸、28貫の長大漢、大館選士どたんと倒れて一本、時間4分35秒、大館選士脳震盪をおこした容子。¹¹⁾

「準決勝の木村選士の対戦者、京都武専の助手、広瀬巖選士である。過去2回戦って、2回とも木村選士の判定勝ち、今度は、3度目の試合である。雪辱に燃える広瀬選士であるが、木村選士の5度目の巨弾、太外刈が的中して決まる。¹²⁾

「決勝の木村選士に対するは、国士舘専門学校教師、石川隆彦選士、過去2回戦って、2回とも、木村選士が一本勝ちしており、石川選士も、必死の作戦をこらして、木村選士に攻め寄せるは必定であろう。対石川戦は、石川選士の姿勢に着目して、今までの試合と違い、十分作戦を練り、何の不安もなく、一本背負投に攻め、3度目の一本背負投があざやかに決まって、石川選士は仰向けに背を半分畳の上にころりと倒れた。時間42秒¹³⁾

栄冠、つひに、彼の頭上を飾ることになったが、この事あるは、もとより木村の努力によるは云ふ迄もない。併し乍、此の麒麟児を

自家に引取って、猛修行を加えた牛島教士の指導も、興って力がある。即ち、木村が今日の栄光ある成果を得たのは、別言すれば、師弟の合作なのである。¹⁴⁾と述べられている。

天覧試合の勝因を挙げてみると、①牛島辰熊八段という良師に恵まれたこと、②死の極限的鍛錬以上の修行をしたこと、③立技、寝技とともに最高の技術を駆使できたこと、④人の3倍以上の稽古量からくる、心、技、体の充実などが挙げられると思われる。

IV. まとめ

木村政彦七段の稽古過程を通じて、戦前の柔道と現在の柔道を比較してみると、①現在の修行者は、柔道を楽しんでいるようであり、苦しんで修行をする姿勢がみられない、②技に対する指導者の研究不足、③選手に対する研究ならびに鍛錬不足、④試合本位で基礎が不十分なまま試合を行う傾向が強い。このことについて「武道の理論¹⁵⁾」で「木村七段の技の習得過程が基本に忠実で理想的」と述べている。

稽古時には、基礎を十分におこないその後に、立技、寝技とともににおこない立技では左右の技を使えるよう努力することが肝心である。木村七段を例にとると、太外刈一つの技に関しても右変形の相手、左変形の相手など対戦者に応じて五通りの攻め方を持っていたといわれ、真の柔道の技とはかくあるべきであろう。

このように考えてみると、戦前の柔道の方

が現在の柔道よりも「心」「技」に勝っているようである。それは現在の柔道はあまりにも試合が多すぎ、平素の稽古の在り方に技の本質を深く追求する時間的な余裕がなくなり、目の試合にとらわれて勝負本位の傾向になりがちである。柔道の本質に深く入るというのではなく、ルール本位にただ負けまい、勝とうとする稽古に傾き修行者も指導者もこれが正常だという錯覚に陥っているのが原因ではなかろうか。

- 11) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p144 大日本雄弁会講談社 1940年
- 12) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p537 大日本雄弁会講談社 1940年
- 13) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p544 大日本雄弁会講談社 1940年
- 14) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p547 大日本雄弁会講談社 1940年
- 15) 南郷継正『増補武道の理論』p211 一三書房 1975年

引用・参考文献

- 1) 朝日新聞社『スポーツ界列伝』朝日新聞社1983年2月21日
- 2) 牛島辰熊伝刊行会『志士牛島辰熊伝』p94 牛島辰熊伝刊行会 1974年
- 3) 老松信一『柔道50年』時事通信社 1955年
- 4) 工藤雷介『秘録日本柔道』P219 東京スポーツ新聞社
- 5) 朝日新聞社『スポーツ界列伝』朝日新聞 1983年2月21日
- 6) 朝日新聞社『スポーツ界列伝』朝日新聞 1983年2月21日
- 7) 木村政彦『鬼の柔道』p139 講談社 1969年
- 8) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p9 大日本雄弁会講談社 1940年
- 9) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p121 大日本雄弁会講談社 1940年
- 10) 宮内省監修『紀元2600年奉祝昭和天覧試合』p135 大日本雄弁会講談社 1940年